

令和 6 年 6 月 26 日現在

機関番号：24701

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K12936

研究課題名（和文）発達障害の「本質的理解」をめぐる社会的分析

研究課題名（英文）A sociological analysis of the "essential understanding" of developmental disorders

研究代表者

佐々木 洋子（Yoko, SASAKI）

和歌山県立医科大学・医学部・講師

研究者番号：70647833

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、発達障害の「（本質的）理解」の必要性について言及されることに着目し、日本における発達障害の「理解」の変遷を明らかにすることで、それらが発達障害児・者の支援における議論とどのように関連しているかを明らかにすることを試みた。そのため、文献資料を用いて関連諸領域における発達障害の「理解」の内実の検討を行った。まず、発達障害についてどのような説明がなされているかを検討した。さらに、具体的な支援の文脈において、それらの「理解」がどのように支援内容と結びついているかを検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、発達障害支援の文脈において用いられる、発達障害の「本質的理解」とは何かを明らかにしようとするものである。発達障害については、当事者・支援者を問わず、支援に関する情報発信が豊富に行われている。当事者・関係者にとってよりよい支援の実現には、管轄の違いを越えて専門領域の連携が不可欠であるが、その支援のあり方を基礎付けている「理解」「本質的理解」の内実を明らかにすることで、学術的意義のみならず実践的意義を持ちうると考える。

研究成果の概要（英文）：In this study, I focus on the need for an "(essential) understanding" of developmental disorders, and clarify the changes in the "understanding" of developmental disorders in Japan. I tried to clarify how this is related to the discussion on support. Therefore, I used literature to examine the actual "understanding" of developmental disorders in related fields. First, I examined how developmental disorders are explained. Furthermore, in the context of specific support, I examined how this "understanding" was linked to the content of support.

研究分野：社会学

キーワード：医療化 発達障害 ADHD

## 1. 研究開始当初の背景

現在いわゆる「発達障害」の代表的なものとして知られる諸カテゴリーは、90年代以降に日本で認知が高まったものである。これらは当初、従来日本で発達障害とよばれていた知的障害等を含む発達上の障害とは区別する形で「軽度発達障害」とよばれていた。通常の学級に在籍する児童生徒のうちには、特別な教育的支援を必要とする者がおり、その中には「学習障害(LD)」、「注意欠陥/多動性障害(ADHD)」、「高機能自閉症」などの障害が疑われる児童生徒が一定数存在する可能性が指摘された(文部科学省 2003)。この段階における「理解」とは、まずもって「そのような障害の存在を知ること」であった。こうした意味での発達障害の「理解」は、障害に関する知識を啓蒙するメディアや当事者、親の会の活動などを通じていわば順調に進み、様々な法律や制度において支援対象として位置づけられることとなった。

発達障害の認知が高まり、障害名および障害特性が知られるようになる一方で、当事者や支援者から、いまだ「(本質的)理解はされていない」との声も聞かれるようになった。たとえば2014年には、『発達障害の「本当の理解」とは』(市川宏伸編、金子書房)が出版されている。他方で、仮に「理解」したとしても、その理解が必ずしもそのまま支援につながり得ないことも指摘されている(勝浦 2010)。約20年かけて広まった社会的理解に対し、それらを障害名のみによる不十分な理解とみなし、さらなる「本質的理解」が求められることをもって発達障害の「理解」をめぐる議論は、第二段階にあるといえるのではないだろうか。そこで本研究では、単に「障害がある」という認識を超えた「(本質的)理解」という語を用いて、どのような主張がなされているかについて検討し、それらが支援という文脈においてどのような意味を持ちうるのかを検討する。

## 2. 研究の目的

本研究では、主に次の2点を目的としている。第1には、発達障害の「(本質的)理解」の概念化および用法の日本における変遷を明らかにすることである。発達障害支援の文脈において、当事者、支援者を問わず、様々な立場から、発達障害の「理解」の必要性について言及されることがある。しかし、その意味するところは、めまぐるしく変遷していると思われる。本研究では、この変遷を明らかにするとともに、現段階において「(本質的)理解」として、何が・どのように想定されているのかについて検討する。そして、それらが発達障害者支援という文脈において、どのような意味と可能性を持ちうるのかを明らかにしたい。

第2に、本研究では、こうした発達障害あるいは逸脱行動の理解をめぐる議論と現状を整理することを通じて、マクロレベルに照準した医療化研究では見落とされがちであった、いったん成立した医学概念がいかに人びとに用いられてゆくのかを検討する。従来の医療化研究では、医学概念の成立は、同時に、専門家による支配の側面が強調して論じられがちであったが、現在では必ずしもそのような状況はみられず、どちらかといえば、患者あるいはクライアント自身が自身の生をよりよくするために、医学概念あるいは治療を積極的に活用する側面が強調されている。こうした医療化論における転換をふまえ、「(本質的)理解」の概念化や用法を検討することによって医療化の現代的展開の一端を明らかにしたい。

## 3. 研究の方法

本研究では、ADHDをはじめとする発達障害の「(本質的)理解」をめぐり、関連諸機関・行為者らが、それぞれどのような概念化と用法を用いているかを明らかにすることが目的である。第1の点については、多様な研究領域における発達障害の「理解」についての概念整理を行い、この整理に基づいて、具体的な現象に関する分析を行う。第2の点については、これらが現代社会(とりわけ当事者・関係者)にとって持つ意義と社会理論・社会学理論にとって持つ意義を考察するという作業を行う。本研究課題を遂行するには、発達障害およびその支援に関する臨床研究の整理、社会理論・社会学理論における発達障害の主題の整理という文献学的作業とならんで、多様なリアリティの位相を提示する作業が必要となると思われる。このため、主として文献調査を行う。また、これらを検証・補強するためのフィールドワーク(関連領域参与者へのインタビュー調査や参与観察)を適宜行う。

## 4. 研究成果

第1の点について、近年の日本社会における発達障害に関する出版物に関して作成したデータベースを基に発達障害の臨床研究および発達障害をめぐる社会状況についての分析を行った。なお、「発達障害」という語には、複数のカテゴリーが含まれているが、これらを一律に論じることは難しいため、ADHDを中心に情報収集を行い、ADHDとの関連性を軸として他カテゴリーを

扱った。発達障害および発達障害支援に関する出版物の蓄積は進んでいる。とりわけ書籍において、当事者およびその家族（同時に専門職であることも多い）による情報発信が顕著である。

また、発達障害としての ADHD の「理解」とはどのようなものを素描するにあたり、ADHD の疾患概念および ADHD の理解について、米国を中心に諸外国の状況との比較検討を行い、その成果の一部は書籍として公刊された。日本で発達障害の認知が高まり始めた 1990 年代以前は、医学領域においてもこれら障害についての認知は低く、その実在に関しても論争的なカテゴリーであった。ADHD についてみると、アメリカで論争とともに確立してきた概念が導入された形であったが、1960 年代から議論等がなされてきたアメリカに比べ、日本では ADHD 概念そのものの受容における論争は相対的には少なく、日本における実践的な診断手順や治療法の確立が目指されていたと思われる。その後、約 20 年経過し、診断や治療方針に関する一定の見解が提示されている現在においても、いまだ疾患概念そのものに関する論争は、ADHD や発達障害を理解するにあたってひとつのポイントであり続けていると考えられる（佐々木 2022）。

第 2 の点については、発達障害を「理解」することと社会への「適応」をいかにして両立するか、あるいは、どちらが優先する / されるのが支援なのか、という点に着目して検討を行った。これらについては事例の個別性が高いことは否めないが、具体的な事例をもとに「(本質的)理解」が支援という観点にどのように結びつき活かされているのかについて、COVID-19 の影響等で実施が遅れているフィールドワーク等で得られた知見も加えて詳細に検討を行い、順次公開していく。

#### <文献>

- ・市川宏伸編、2014 『発達障害の「本当の理解」とは—医学、心理、教育、当事者、それぞれの視点』金子書房
- ・勝浦眞仁、2010 「非定型発達の生徒を「異文化」に生きる人として位置付ける意義とその難しさ--特別支援教育支援員の立場から」『人間・環境学』19: 25-33 .
- ・佐々木洋子、2022 「ADHD をめぐる論争--アメリカと日本の比較」佐藤純一・美馬達哉・中川輝彦・黒田浩一郎編 『病と健康をめぐるせめぎあい コンテステーションの医療社会学』ミネルヴァ書房: 199-218.
- ・文部科学省、2003 『今後の特別支援教育の在り方について（最終報告）』

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 美馬達哉, 志水洋人, 高木美保, 佐々木洋子
2. 発表標題 精神疾患・障害をめぐるせめぎ合いの社会学 - コンテストーションの諸相 - (RTD)
3. 学会等名 第48回日本保健医療社会学会大会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 佐藤 純一、美馬 達哉、中川 輝彦、黒田 浩一郎	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 328
3. 書名 病と健康をめぐるせめぎあい	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------